

血液製剤の使用状況と廃棄製剤削減の取り組みについて

◎大谷 実里¹⁾、木村 沙紀¹⁾、山本 喜則¹⁾、丸山 千恵子¹⁾、木村 豊¹⁾、中村 文隆¹⁾
帝京大学 ちば総合医療センター¹⁾

【目的】当院では使用状況を月単位で解析し適正輸血の推進や廃棄製剤削減に取り組んでいる。2015年には院内在庫数に関して検討を行い、在庫製剤数の削減を図った。今回、過去5年間の院内に在庫のあるRBC、FFPの使用状況、及び廃棄率、廃棄理由について解析を行い、2015年の院内在庫数削減の効果と、廃棄製剤の更なる削減について検討したので報告する。

【対象】2012年1月から2016年12月までに使用、廃棄した製剤単位数より廃棄率を算出し解析、検討を行った。また、廃棄理由についても検討を行った。

【結果】RBCの使用単位数は2012年4234単位、2013年4221単位、2014年4235単位、2015年4102単位、2016年3966単位と推移していた。廃棄率は2012年1.56%、2013年1.15%、2014年1.30%、2015年0.52%、2016年0.38%と2015年より大幅に減少していた。FFPの使用単位数は2012年1416単位、2013年1300単位、2014年1928単位、2015年1523単位、2016年1338単位と推移していた。廃棄率は2012年0%、2013年1.93%、2014年2.06%、

2015年1.18%、2016年1.89%と2015年に減少したものの2016年には増加に転じた。RBCの廃棄理由は期限切れによるものが多く、FFPの廃棄理由は副作用発症により輸血中止となった製剤が多い傾向が見られた。期限切れによるものは2015年に減少したものの、2016年には増加に転じていた。増加した理由について廃棄製剤を調査した結果、2014年以降納品の製剤から徐々に納品日から有効期限までの期間が短くなっていた。

【まとめ】今回の解析により、RBCに関しては期限切れによる廃棄製剤の数は減少傾向にあり2015年の院内在庫数削減の効果があるものと考えられた。FFPも院内在庫数の見直しにより廃棄率は減少するものと思われたが、納品日から有効期限までの期間の短縮傾向により効果が見られなかった。FFPに関して更なる院内在庫数、製剤廃棄の削減を行うため、FFP240mL製剤とFFP480mL製剤の使用調整を行うとともに納品日から有効期限までの期間に関しても考慮に入れる必要があると考えられた。

【連絡先】0436-62-1211 内線 1176